

著名社会学者孫本文の二つの社会学観の通底性について

——民国期から新中国成立期まで——

星 明

〔抄 録〕

本稿は、孫本文（1892~1979）の民国期における社会学観と新中国成立後の社会学観の相違およびその両者に通底する考え方を考察した。中国における政治と知識人および学問との関係の一つの事例である。

孫本文の民国期と新中国成立後の社会学観には顕著な変化がみられる。すなわち、一口でいえばブルジョア社会学からマルクス主義社会学への変化である。この理由について、中国共産党は知識人自らが自律的に旧思想を捨てて、新たな思想を体得したからだというし、A. インケルスは共産主義中国が社会学の教育と研究を禁止し、社会学者を迫害したからだという。確かに、知識人に対する思想改造も、社会学の完全な禁止もそれだけで非常に大きな社会的事象であるし、いずれの理由も説得力がある。

本稿では、どちらの理由も肯定するが、さらに孫本文の社会学観に通底する社会学観を考察した。その結果、二つの異なった社会体制においても孫の社会学に対するあくなき探究心に基づいた、かれの社会学観の一貫性を読みとることができた。

キーワード：ブルジョア社会学，マルクス主義社会学，中国共産党，思想改造，反右派闘争

はじめに

本稿は、孫本文の民国期の社会学に対する言説と新中国成立後のそれとの相違をそれぞれ資料に基づきみることによって、当時の中国の政治的、社会的背景のなかでの、政治と社会学、政治と知識人の問題を具体的に考察したものである。孫本文の社会学の学問的性格ではなく、むしろかれの社会学に対する観念をみたものである。

孫本文⁽¹⁾は、29歳から34歳までアメリカで社会学を学び帰国後、中国の社会学界でもっとも多く著作を著し、大学および学術団体においてもっとも大きな影響力をもった社会学者で

あった。それは、当時の中国の社会学界で「北陳南孫」（北の陳達、南の孫本文）という伝説があったことから⁽²⁾、また A. インケルスが共産党政権の新中国で社会学が禁止された時の代表的社会学者として孫本文の状況を述べていることからもうかがえる^(3,4)。2012年には、全10巻からなる著作集『孫本文文集』⁽⁵⁾も刊行されている。孫本文は1949年10月1日の中華人民共和国建国を57歳で迎えた。同年4月には、中央大学第2回校務維持委員会主席になり、教員と学生を率いて大学の秩序を保守した。同年5月には、大学は南京市の軍事管制委員会代表に移管され、中央大学は南京大学と改名され、社会学部は廃止されて、政治学部に編入された。それにもなつて、孫も政治学部の教授に移っている。1951年9月、かれが59歳の時、中国共産党の知識人に対する指導のもとで、華東革命大学政治研究院に入り、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想、共産党の歴史や政策を学び、思想改造を行なった。

その後かれは自らがかつて学び、教え、研究してきた社会学は、資本主義に奉仕するブルジョア社会学であったと、自己批判をした。周曉虹らは「1957年以後、孫本文先生は自分で保存していた1949年以前のすべての著作を焼き捨てたが、ただ『社会学原理』（1935）一冊だけを残した」⁽⁶⁾という。孫本文は、1956年の論文「帝国主義時代資産階級社会学的思想内容及其対旧中国的影响」⁽⁷⁾（帝国主義時代のブルジョア社会学の思想内容およびその旧中国に対する影響）をはじめ、のちにみるようにブルジョア社会学を批判する多くの論文を書いた。1957年6月にはじまった反右派闘争で、新中国成立以来次々に制限されてきた社会学の教育と研究は完全にタブーになり⁽⁸⁾、同時に多くの社会学者は右派分子とされた。しかし、孫本文は右派の対象にはされなかった。その理由として、周曉虹は孫本文が政治や社会学に対して慎重な態度をとったことをあげている⁽⁹⁾。しかし、1966年6月にはじまった文化大革命では、まず「靠邊站」（停職を命ぜられ調査される身のうえ）になり、続いて「資産階級反動學術權威」、「專政対象」（プロレタリア独裁の対象）と決せられ、家財の没収や批判にあい、大学内での労働に従事させられた⁽¹⁰⁾。この時、すでに74歳の齢を重ねていたが、さらに1969年には、77歳で大学分校の農場労働に送られた。1972年、80歳の時、南京大学の教授職に復帰したが、もっぱら文献研究、執筆、翻訳などに従事した。1979年2月21日、逝去、享年87歳。同時に、江蘇省共産党委員会は、南京大学の求めに対して、孫本文の名誉回復を完全に行なった。孫本文は87年の人生において57年間を民国で（1921年から1926年までアメリカ留学）、30年間を新中国で、二つの異なる政治体制のもとで過ごしたことになる。

うえにみた孫本文の略歴から、われわれは民国期から新中国成立後にかけて、中国における知識人のたどった歴史をみることができる。

1、孫本文の民国期と新中国成立後の社会学観—社会学と政治的・社会的条件—

政治状況が明確に、顕在化して思想や学問をコントロールすることもあれば、そのコントロー

ルが漠然として、潜在化していることもある。第2次大戦後でみれば、前者は中国で、後者は日本でみられることである。また、スターリン体制下のソ連も前者であった。台湾は両者の中間ないしやや後者に近い位置にあった。というのも、台湾の社会学者に対して蕭新煌が実施した意識調査の間に次のような回答がみられるからである。すなわち、「社会学は現実の社会と政治的情況の影響を大きく受けているといえるか」という問いに対して、調査対象35名中、31人の回答があり10名が「大いに思う」、20名が「思う」と回答している。この回答のなかで、政治的情況からの制約について「多くの社会現象の解釈は政治的压力を受けるので、徹底的に掘りさげることは無理である」、「研究指定機関の目的の影響を受けるので、明確な研究の方針と主流を生みだすことができないし、またさまざまな社会現象を開放的に研究することができない」、「政治的タブーがある」、「社会問題の研究に対する政府の従来どおりのタブー視がある」などの記載がみられるからである⁽¹¹⁾。

ところで、インケルスは『社会学とは何か』のなかで社会学と自由社会について、デュルケムが指摘した社会学が誕生し、発展することができる二つの条件をあげている。すなわち、「第一に、伝統主義がその権威を失っていなければならなかった。自分たちの制度は、すべてあるべくしてあるのだと考えている人びとの間では、いかなるものも社会的な事象に働きかけようとする思想を刺激することができない。第二に、もっとも複雑でもっとも不安定な現象を、明確に限定されたことばにあえて翻訳しようとするだけの、理性の力に対する真実の信頼が必要であった」⁽¹²⁾ということである。

デュルケムはフランスではこの二つの条件を満たしており、インケルスはアメリカもこれらの条件を満たしているという⁽¹³⁾。

一方、これに反して、この条件を欠いている社会として、インケルスは当該時期のソ連と中国を具体的にあげている。ソ連では国家樹立後、間もなく大多数の社会学者は出国したり、あるいは粛清されたりした。ソ連では、社会学はブルジョア社会科学とみなされ、「真の」マルクス・レーニン主義的社会科学に対抗するための手段として⁽¹⁴⁾社会学者は資本主義の「走狗」や「賃金奴隷」だけがたずさわる学問とみなされた。

同様に、共産主義中国でも、社会学者は同じ事態に遭遇した。中国共産党が政権を掌握する以前、およそ140名の教員のもとで1,000人余りの学生が社会学を学んでいたが、共産党政権はこれらの活動を完全に禁止し、マルクス主義の新たなカリキュラムに取り替えた。そして、社会学者はその過去の職業ゆえに白眼視された⁽¹⁵⁾。

孫本文は共産党政権が生まれる以前、卓越した社会学の著作を発表していたが、あるアメリカの社会学者が孫に何篇かの論文を送ってくれるように頼んだところ、孫は次のような非常にがっかりするような返信をした。「わたしはついに自分が以前に書いた著作はすべて焼き捨てるべきであることがはっきりわかりました。したがって、あなたに送るいかなる著作もありません。わたしは以前、マルクスの著作を学ぶことを軽視してきたことをようやく自覚しました

ので、現在、わたしは毎日多くの時間をかれの著作の学習に費やしています。どうか、もうわたしに手紙を寄こさないでください」^(16,17)と。

ここにいうあるアメリカの社会学者とは Albert R. O'Hara（郝继隆）⁽¹⁸⁾ のことであり、孫本文とはかつて1947年から翌年にかけて、南京の国立中央大学で同じ社会学の教授仲間であった。この事実についてインケルスはまったく触れていないが、一面識もないアメリカ人学者からではないことはやはり触れるべきであろう。

O'Hara は中央大学社会学研究所で修士課程の学生に対して開設された5科目のうち社会学研究方法、欧州社会学、高級社会学理論の3科目を担当し、孫本文が修士論文の1科目を担当していた⁽¹⁹⁾（あとの1科目は社会工作的理論与方法で、アメリカとカナダの公衆福利機構で仕事をしたのち、国民政府社会部児童福利の専門家顧問であるカナダ籍で Chaisson（蔡森夫人）が兼担していた⁽²⁰⁾）。

孫本文は新中国成立後も、次のような多くの論著を発表しているが、とりわけ1956年から1958年の間は主としてブルジョアジー批判およびブルジョア社会学批判の論文を発表している⁽²¹⁾。

1. Sociology in China, 1949, *Social Forces*, Vol.27, No.3, pp.247-251。
2. 「現代社会科学在中国的偉大成就」（中国における現代社会科学の偉大な業績）（1950年10月1日、南京新華日報）。
3. 「美帝財福集中和労働人民貧窮与失業嚴重」（アメリカ帝国の富の集中と人びとの貧困および失業のゆゆしさ）（1950年12月21日、南京新華日報）。
4. 「我如何認識偉大的毛沢東思想与偉大的中国共産党」（わたしはどのようにして偉大な毛沢東思想と偉大な中国共産党を認識したか）（1951年6月29日、南京新華日報）。
5. 「帝国主義時代資産階級社会学的思想内容及其对旧中国的影響」（帝国主義時代のブルジョア社会学の思想内容およびその旧中国に対する影響）、『新建設』、1956年11月号、光明日報社、pp.37~45。
6. 「堅持反对資産階級社会学復辟」（ブルジョア社会学の復活に反对を堅持する）（1958年9月）、中央宣伝部から電報で呼びつけられ、北京に赴き、中国科学院が招集した「全国社会科学界反右派鬭争座談会」に参加し、発言したもの。後に、10月4日付の文匯報にも掲載された。
7. 「我国最適宜的人口数量和控制人口増長的効力問題」（わが国の最適人口と人口増加制限の効果の問題）、1957年、江蘇省政治協商第1回第3次会議での発表。
8. 「八億是我国最適宜人口数量」（8億がわが国の最適の人口である）1957年5月11日、文匯報。
9. 「關於現代資産階級社会学理論的本質和内容」（現代ブルジョア社会学理論の本質と内容

- について), 『學術月刊』, 1957年第4期, 上海市社会科学界聯合会, pp.27~36.
10. 『統計学と統計図表在經濟地理方面的応用』(統計学と統計図表の經濟地理での応用), 1957, 上海新知識出版社。
 11. 「批判費孝通の所謂社会人類学实地調査」(費孝通のいわゆる社会人類学調査を批判する), 1958年, 第2期。
 12. 「批判我旧著『社会学原理』的資産階級思想」(わたしの旧著『社会学原理』のブルジョア思想を批判する), 『哲学研究』, 1958年第6期, 中国社会科学院哲学研究所, pp.41~49。
 13. 「論高速度發展問題」(高度發展問題を論ずる), 1959年7月24日, 南京日報。
- 以下, 14から17は1957年から1961年までの出版。
14. 『統計学』(南京大学出版)
 15. 『統計学と統計図表』(南京大学出版)
 16. 『經濟統計学』(南京大学出版)
 17. 『国民經濟計画』(南京大学出版)
 18. 「關於国民經濟綜合平衡的一个理論問題」(国民經濟綜合バランスの理論問題について), 1962年, 南京經濟学会年会提出論文(ガリ版刷り原稿が整理されて孫本文文集第10巻「1949后專著, 論文及其他」に掲載されている)。
 19. 「現代資産階級社会学概説」(現代ブルジョア社会学概説)(『江海学刊』, 1962年1月号, 江蘇省社会科学院, pp.42~49。)
 20. 「康有為和章太炎最早把資産階級社会学传入中国」(ブルジョア社会学を最初に中国に伝えた康有為と章太炎)(『江海学刊』, 1962年4月号, 江蘇省社会科学院, pp.30~31。)
 21. 「關於人口地理学的对象問題」(人口地理学的对象問題について), 1962年(自筆原稿が整理されて孫本文文集第10巻「1949后專著, 論文及其他」に掲載されている)。
 22. 「現代修正主義和和平競賽思想是現代資産階級社会学思潮“統一工業化社会論”和“經濟成長階級論”的變種」(現代修正主義と平和競争思想は現代ブルジョア社会学思潮の“統一工業化論”と“經濟成長階級論”の變種である), 1962年, 江蘇省政治協商第2回第3次會議での発表。
 23. 「七年来的社会学」, 『革命文選』, 1972年。
 24. 『中国人口計画生育問題』(中国の人口の計画出産の問題), 1978年(自筆原稿が整理されて孫本文文集第10巻「1949后專著, 論文及其他」に掲載されている)。
- 1972年から1974年まで, 『瑞士史』などヨーロッパ国家の国別史の翻訳に携わり, 江蘇人民出版社から出版。国連の文献資料などの翻訳に携わる。
- 1975年から1978年まで, 「評論美国現代兩位著名实用主義哲学家權威詹姆斯和約・杜威」(評論アメリカの現代の二人の著名プラグマティズム哲学者の權威者ウイリアム・ジェー

ムスとジョン・デューイ),「評論德国古典哲學家黒格尔」(評論ドイツの古典哲學者ヘーゲル)などの翻訳の完成。自著『現代西方資産階級哲学流派簡介』(現代西洋ブルジョア哲学の流派の紹介)(未完稿)。

孫本文はうえの「批判我旧著『社会学原理』的資産階級思想」のなかで、「わたしは搾取階級の家庭の出身で、長期にわたって封建的な教育およびブルジョアジーの教育を受け、また長い間ブルジョア社会学の教育と研究に携わってきたので、解放以前この学問の階級の本質について正確な認識がなかった。解放以後、党の育成と教育のもとでマルクス・レーニン主義理論を真剣に勉強し、ブルジョア社会学の反科学性と反動性を認識できた。整風運動が繰り返されてから、反右派闘争と双反運動(反浪費反保守運動)を経て、学術思想上、社会主義と資本主義の二つの道の闘争の重要性が本当によくわかった。ブルジョア社会科学の思想の残り滓を徹底的に除かなければ、社会主義の社会科学を確実に築きあげることができない。新たなものを築く前に必ず古いものを壊し、プロレタリアートを奮い立たせる前に必ずブルジョアジーを滅ぼすのである。したがって、すでにわたしが近年発表したブルジョア社会学についての一般的な批判以外に、わたしが過去に著わした『社会学原理』に対してもう一度具体的な分析批判を行なうことで、この著書のブルジョア思想の本質を考えたい。それによって、自らの思想改造の基礎を固めたい」⁽²²⁾と述べている。

孫本文は「…この著作『社会学原理』は完全にブルジョアジーの立場に立ち、唯心論の観点および形而上学的な方法論を利用して編纂したものであるといえる」⁽²³⁾と述べ、そして、かれは著作がもつ反科学的な論点として次の7点をあげている⁽²⁴⁾。すなわち、①折衷主義の傾向があること、②物質的財貨の生産様式が社会構造および社会発展に対して及ぼす決定的な作用を軽視したこと、③人民大衆の歴史に及ぼす決定的な役割を軽視したこと、④物質上の技術的な発明を重視しすぎたこと、⑤改良主義の思想を広めたこと、⑥マルサス主義を宣伝したこと、⑦「文化」という概念を強調しすぎたことである。

学問上の観点からはうえの七つはなんら問題をもつものではないが、当時の中国共産党政権が受け入れ、理解した限りのマルクス・レーニン主義の観点からみれば問題があったのである。

孫本文は「じつは、この本のもっとも重要な特徴は生活している実際の社会、つまり半封建・半植民地の旧中国に対してさえ、いかなる暴露も批判もあえてしていないことである」⁽²⁵⁾といい、「総括していえば、『社会学原理』はブルジョアジーの立場、観点および方法を採用した以上、そのほかの論点もすべて間違がっている。そのうえ、わたしが根拠とした欧米のブルジョア社会学、とくにアメリカの社会学はすべて20世紀の帝国主義の社会科学のカテゴリーに属している。それらはブルジョアジーのための発言であるだけでなく、かつ帝国主義のお先棒を担っている。したがって、わたしのこの本はブルジョアジーの立場にたって議論したものであることは間違いない。これがわたしの旧著に対する初歩的な批判である」⁽²⁶⁾と結論付けている。

また、この1年前の1957年には「わたし個人は以前長期間ブルジョア社会学について研究してきた。しかし、いまわたしはだいたいマルクス・レーニン主義の思想武器を自分のものにして、この学問の階級性を発見した。旧い学術思想を捨てることをいささかも惜しいと思わないし、そのうえ『後悔先に立たず』と思う」⁽²⁷⁾と断言している。

一方で、かつて孫本文はこの『社会学原理』のなかで、当時の人たちが社会学と社会主義および社会学と史的唯物論を誤解していることについて次のように述べている。「第一は、社会学を社会主義と混同する誤解である。そもそも社会学は一つの科学であり、社会主義は一つの主張である。両者にはそれぞれ領域があり、混同することは許されない。このわたしは決して社会主義を研究することに反対するものではない。社会主義を社会学とし、社会学を社会主義と混同することに反対するのである」⁽²⁸⁾と、そして「第二は、社会学を唯物史観とする誤解である。…社会現象の真相を理解するためには、はじめに主観的な見解をもたずに社会現象を解釈することである。社会現象を解釈するかなめは、観点は観点として、科学は科学として、両者を混同して論じないことである。このわたしは唯物史観を研究することに反対するものではない、唯物史観で社会学を解釈し、社会学を一種の史観とする主観的な見解に反対するのである」⁽²⁹⁾と。さらに新中国成立の前年、1948年には本稿の末尾に資料として訳出した中国の社会学の回顧と展望まで論じているのである。

この『社会学原理』は1935年に出版されて以来、1940年には国民政府教育部によって「大学叢書」に定められ、その後改訂を経て11回も再版されている。韓明謨は「『社会学原理』は孫本文の代表作であるのみならず、30年代から40年代の中国の大学での社会学の理論上の代表作でもある」⁽³⁰⁾と述べている。孫自身もうえで触れたように、この一冊は焼き捨てずに保存していた。そして、その残された書の扉に次の二つの題辭を記している。一つは「すべてブルジョアジーのものは分析し、批判しなければならない。同時に、反面教材として、これによってマルクス・レーニン主義の教育を深める教科書とすることができる。この書も例外ではない。この旧い著書を残して、後の世代のひとの比較研究に供したい。作者がこの著作を書いた時、国家と人民のためになると誤って認識し、この書が反科学的で、反人民的であることがわからなかった。もしわかっていたら、誰がこんなにまで大きな力を費やして、それを書いたであろう。1963年8月作者記 73歳」⁽³¹⁾、もう一つは「当時、中国はブルジョア民主主義革命を経て、資本主義的民主国家をつくらなければならない、そのためにブルジョア社会科学を發展させなければならない、これが国家と人民のためになると思っていた。再び記す」⁽³²⁾と。

うえでみられるように、孫本文の民国期と新中国成立後の社会学観は大きく異なっていることがわかる。

2、孫本文の二つの社会学観に通底するもの一かれの思想の改造について一

孫本文は、中国共産党の思想の改造運動のなかで、自らブルジョア思想をもっていたことを認識し、旧社会での社会学の著作のほぼすべてを焼き捨てた。そして、自らの代表作の『社会学原理』に対しても、上述したように詳細で分析的な批判を行なった。

中国共産党は、反右派闘争期に、ブルジョア社会学の復活を主張する社会学者を論駁し、批判するために、孫本文に語らせた⁽³³⁾。これは、共産党の知識人に対する思想改造の効果を誇示する役割も大いに果たしたことであろう。インケルスも、共産党政権のもとで、かつての社会学を捨てて、マルクス主義を学習している孫本文のことを紹介している⁽³⁴⁾。つまり、孫本文は自律的にしろ、あるいは他律的にしろ、古い思想を捨てて、新しい思想へと変化したという。そのうえ、かれ自らの過去の思想そして社会学を自己批判さえしているのである。

しかし、このような絵に描いたような一般的な解釈だけでよいのであろうか。ここで、筆者は一つの解釈を提示したい。

かつて孫本文は『社会学原理』⁽³⁵⁾の序のなかで、「わが国は革命からこのかた⁽³⁶⁾、社会の構成にはわかにドラスチックな変遷があらわれ、外には周りの侵略と圧迫が迫り、内には人びとの要求があり、ちょうど民族存亡の危機の震撼に覆われた秋だった。いかにして人びとの要求を叶え、周りの侵略と圧迫を取り払うか、もっていかにして適切な調整をはかるかは、文化の発展をまっけはじめて実現できる。中国文化の発展をはかり、もって中国民族のさらに優越した生き残りを追求することは、社会学者に与えられた責任である」⁽³⁷⁾と述べている。孫本文の国を思い、人びとを思う気持ち、そしてそれに答えなければならない社会学者の使命が切実に述べられている。

また孫本文は『社会学原理』のなかで、社会学と社会主義と混同することに反対し、さらに史的唯物論で社会学を解釈し、社会学を一種の史観とする主観的な見解に反対したが、しかし「決して社会主義を研究することに反対するものではない」し、また「史的唯物論を研究することに反対するものではない」と言明している。筆者には、このことばにかれの学問観のヒントがあるように思える。つまり、一般に解釈されるようなブルジョア社会学からマルクス主義社会学への転向ではなく、新中国成立以降、孫本文にとっては社会主義も史的唯物論も方法論として、研究対象になったのではなからうか。この研究対象があったからこそ、1938年10月に清華大学の学生で、共産党員だった次男孫世実⁽³⁸⁾の夭折に耐え、そして反右派闘争にも（孫本文は右派のレッテルを張られなかったが、その闘争のなかで自らの1921年のアメリカ留学から1948年までの28年間にわたる社会学研究を自ら批判する論文を書いた）、さらに文化大革命では資産階級反動学術権威、専政対象にされながらも耐えられたのではなからうか。筆者はそのように考えている。もちろん、筆者のこの考え方に対して、孫本文について処世にたけたひと、日和見主義者などといった人物評もなりたつかもしれないが、筆者はそのような評価

のある資料にいままで接したことはない。

うえの筆者の理解はあながち無理があるとは思われない。というのも、韓明謨および周曉虹による次のような記述があるからである。すなわち、韓明謨は、孫本文が「『(自らが) 保存している旧著選書の巻の順番と内容』(1927-1948) (数は著書18巻、論文集2巻および附巻1になる。論文集の第1巻は『社会学体系とその流派』とし、収録論文27編で各編に名称がある)の出版を計画した。別に、『新著選集』第1巻(1956-1962)、収録論文27編の出版を計画した」⁽³⁹⁾と記している。また、周曉虹も「1963年には、1957年に社会学の『復活』の潮流が真正面から痛烈な打撃を受けてからまだ6年もたたず、社会学の再建が完全に望みのない状況のもとで、孫本文は人知れずまだ本気に、自らが1927年から1948年までに発表し、出版した著作を20巻に編纂しようとした。この『ドンキホーテ型』に近い『反抗』のなかから、われわれは孫本文の社会学に対するいつわりのない態度をみることができる。きちんと写し取ったもののなかに、この73歳の老身のこころのなかに漂う悲哀、頑なで甘受することのない心根が滲んでいる」⁽⁴⁰⁾と孫本文のこころの内奥を推察するかのように言及しているからである。

そして、それゆえ、また筆者は、中国共産党が孫本文に対して行なった思想の改造の効果は内面に達するものではなくて、むしろ外面的な一部分に過ぎなかったと考えざるを得ないのである。

かの時の総書記鄧小平が、1979年3月20日、党の理論工作討論会での「四つの基本原則を堅持しよう」という講話のなかで、「政治学、法学、社会学および世界政治の研究をわれわれは過去長年にわたって軽視してきたため、いま早急に補習する必要がある」という意見を述べた。その直前、1979年3月15日から18日まで全国哲学社会科学計画会議準備処の名義で、社会学座談会が招集された。ここで中国社会科学院院長の胡喬木は社会学に対してとった処理の誤りを次のように正し、社会学の名誉を回復した。すなわち、胡は「社会学が一つの科学であることを否定し、非常に乱暴なやり方で社会学の存在、発展、伝授を禁止したことは科学的観点からみても、政治的観点からみても誤っているし、社会主義の根本原則にも違反している」と発言した。この時、中国の地に社会学が正式に回復した。孫本文逝去の25日後のことである。孫本文が存命であれば、このことばをどのように聞いたであろう⁽⁴¹⁾。

おわりに

うえに述べてきたことから、以下に要点をあげてこの小論のまとめとしたい。

1. 民国期の孫本文は社会学と社会主義、社会学と史的唯物論を峻別したが、決して社会主義および史的唯物論の研究を否定していない。
2. 孫本文は、民国期に学び、教え、研究した自らの社会学を新中国成立後、ブルジョア社会学であったとして否定した。

- 3, 孫本文が新中国成立後に行なったブルジョア社会学批判は、比較的紋切り型である。
- 4, 孫本文の社会学観の変化は思想の改造に起因するという考え方（中国共産党）と中国共産党政権の社会学の禁止政策に起因するという考え方（アレックス・インケルス）とがあること。
- 5, 孫本文は、百家争鳴期に多くの社会学者が行なった社会学の復活運動には参加しなかった。その結果、孫本文は反右派のレッテルをはられなかった。
- 6, 孫本文の社会学観は、民国期と新中国成立後をとおして、その深層においては変化がないこと。そのことは反右派闘争で社会学と社会学者が完膚なきまでに否定されたのちでさえ、民国期の自らの社会学研究の著作集を計画してことからわかる。この6が本稿でのもっとも重要な要点である。

〔注〕

- (1) 孫本文の年譜や学術年表などについては、韓明謨、2005、『中国社会学名家』、天津人民出版社の附録「孫本文年譜」（pp.83-99）、孫本文、2011、『当代中国社会学』（中華現代学術叢書）、商務印書館の「孫本文先生学術年表」（陸遠、pp.321-327）および周曉虹、2012、「孫本文と20世紀上半期の中国社会学」（孫本文と20世紀上半期の中国社会学）、周曉虹主編・孫本文文集編輯委員会、2012、『孫本文文集』（全10巻）第1巻『社会学原理』、社会科学文献出版社、pp.1-26に詳細があるので参照されたい。
- (2) 袁方・全慰天、1980、「社会学家陳達」『社会科学戦線』、1980年2期、吉林省社会科学院、p.128。
- (3) Inkeles, Alex, 1964, *What is Sociology* (=1967, 辻村明訳、『社会学とは何か』、至誠堂、pp.204-205.)
- (4) 陳樹徳は「インケルス先生の孫本文についての論評は偏向があるが、この点はいうまでもない。しかし、かれの論評をとおして、むしろ孫先生はすでに亡くなられたにもかかわらず、国際的な名声を受ける社会学者であることをわれわれに知らしめた」（陳樹徳、1984、「孫本文と《社会学原理》」『読書』、1984年3期、生活・読書・新知三聯書店、p.143。）筆者は、陳のいうインケルスの偏向とは中国共産党がその理解する限りでのマルクス・レーニン主義のもとで、中国の社会学を禁止し、社会学者を冷遇したと論断していることを意味していると理解している。
- (5) 第1巻社会学原理、第2巻社会心理学、第3巻近代社会学発展史、当代中国社会学、第4巻社会学上之文化論、社会与文化、社会的文化基礎、社会変遷、社会思想、第5巻社会学的領域、社会学ABC、人口論ABC、社会問題、公民・社会問題、第6巻現代中国社会問題（緒論、家族問題、人口問題）、第7巻現代中国社会問題（農村問題、労資問題）、第8巻論文集（1915-1936）、第9巻論文集（1937-1948）、第10巻1949年后専著、論文及其他である（周曉虹主編・孫本文文集編輯委員会、2012、孫本文文集（全10巻）、社会科学文献出版社。）
- (6) 周曉虹主編・孫本文文集編輯委員会、2012、孫本文文集の第1巻・社会学原理の扉に記されたことば。
- (7) 孫本文、1956、「帝国主義時代資産階級社会学的思想内容及其対旧中国的影響」『新建設』、1956年11月号（総第98期）、pp.37-45。
- (8) 1952年に社会学部をもつ大学は中山大学と雲南大学の2校だけになり、1953年にはその2校の社会学部も廃止されて、社会学の教育および研究は大学において完全に活動を停止していた（韓明謨著、1995、『中国社会学史』=2005、星明訳、「中国社会学大事記」『中国社会学史』、行路社、p.244。）
- (9) 周曉虹は「もしもの話であるが、孫本文は1949年以後の30年間で、なにか幸運なことがあったとすれば、おそらく意外にも、かれは大多数の社会学者のいずれもが逃れることできなかった『1957

之劫』(1957年の災難)を逃れたことである。歴史の不思議であるが、もしかすると1949年以前国民党政権と付き合いが非常に深く、革命勝利後、孫本文は政治ないし自己の専門に対してずっと慎重な態度で答えたために、これがかえって北京の社会学者とは違って、社会学を復活させることを夢みしたことによって1957年の『反右』闘争のなかで一網打尽にされることはなかったのである」と慎重ではあるが、一步踏み込んで述べている(周曉虹, 2012, 前掲論文, p.5。)

- (10) 韓明謨, 2005, 前掲書, pp.98-99。
- (11) 蕭新煌, 1986, 「社会学在台湾-從『伝統』的失落到『中国化』的展望」蔡勇美・蕭新煌編『社会学中国化』远流圖書公司, 第14章所収。(= 1995, 星明訳, 「台湾の社会学-『伝統』の失墜から『中国化』の展望へ-」, 星明, 1995, 『中国と台湾の社会学史』, 行路社, pp.147-187。蕭新煌による調査は、台湾で1949年に布告された戒嚴令が38年間後の1987年に解除される前になされたものであることを考慮して読む必要があることはいうまでもないことである。
- (12) Inkeles, Alex, 1964, 辻村明訳, 1967, 前掲書, p.204。ただし、引用にあたって訳文を一部変更した。
- (13) 同上, 日本語訳, p.204。ただし、引用にあたって訳文を一部変更した。
- (14) 同上, 日本語訳, p.204。ただし、引用にあたって訳文を一部変更した。
- (15) 同上, 日本語訳, p.204。
- (16) 同上, 日本語訳, pp.204-205。
- (17) この書面の内容に関して、周曉虹は「しかし、孫本文のマルクス主義に対する受け入れはつまるところ受動的であり、自分で望んだものではないとさえいえる」と明言している。これはかれの2011年の同じタイトルの論文にはない文言であり、2012年の新しい論文に挿入されたものである(周曉虹, 2012, 前掲論文, 周曉虹編, 2012, 『孫本文文集・第1巻・社会学原理』, 所収, 社会科学文献出版社, p.5)。以前の論文とは「孫本文と20世紀上半期の中国社会学」, 孫本文, 2011, 『当代中国社会学』(中華現代學術叢書), 商務印書館, 所収(pp.328-351)のものである。
- (18) 「Albert R. O'Hara (郝继隆)はアメリカのカリフォルニア州のひとで、カトリック大学の社会学博士であり、アメリカのサンフランシスコ市立大学、セントルイス大学の社会学部教授を経て、中央大学社会学部の専任教授になって間もなく3年になるが、学部教員や学生からすこぶる好感をもたれている」と記されている。('社会学界消息・国立中央大学社会学研究所近訊', 1948, 『社会建設月刊』, 復刊, 第1巻第8期, p.46。)
- (19) 「社会学界消息・国立中央大学社会学研究所近訊」, 1948, 『社会建設月刊』, 復刊, 第1巻第8期, p.46。
- (20) 同上, p.46。
- (21) この著作のリストは、主に前掲の『孫本文文集』および韓明謨, 2005, 「孫本文年譜」, 前掲書所収, pp.83-99などから作成した。
- (22) 孫本文, 1958, 「批判我旧著『社会学原理』的資産階級思想」(わたしの旧著『社会学原理』のブルジョア思想を批判する)『哲学』, 1958年第6期, p.41。
- (23) 孫本文, 同上, p.45。
- (24) 孫本文, 同上, p.45, p.49。
- (25) 孫本文, 同上, p.49。
- (26) 孫本文, 同上, p.49。
- (27) 孫本文, 1957, 「關於現代資産階級社会学理論の本質和内容」『學術月刊』, 1957年第4期, 上海市社会科学界联合会, p.36。
- (28) 孫本文, 1935 (2012), 『社会学原理』(孫本文文集第1巻), 社会科学出版社, p.457。
- (29) 孫本文, 同上, pp.457-458。
- (30) 韓明謨, 2005, 前掲書, p.75。
- (31) 孫本文, 1935 (2012), 前掲書, 顔写真の裏ページ。
- (32) 孫本文, 同上。

- (33) 党中央宣伝部から電報で呼びつけられ、北京に赴き、中国科学院が招集した「全国社会科学界反右派闘争座談会」に参加し、発言。「堅持反対資産階級社会学復讐」（ブルジョア社会学の復活に反対を堅持する）（1958年9月）、のちに、10月4日付の文匯報にも掲載された。
- (34) Inkeles, Alex, 1964, (= 1967, 辻村明訳), 前掲書, pp.204~205 の O'Hara への手紙の部分。
- (35) 楊雅彬, 2010, 『近代中国社会学（増訂版）』（上冊）, 中国社会科学出版社, p.402。陸遠, 2011, 「孫本文先生学術年表」, 孫本文, 2011, 『当代中国社会学』（中華現代学術名著叢書）, 商務印書館, 所収, p.324。陳樹徳は、1935年の『社会学原理』の初版は5編26章であったが、1940年に国民政府教育部によって、大学叢書に定められたのち、加筆修正がなされ、1944年9月の新版では5編28章になったと記している（陳樹徳, 1984, 前掲論文, pp.143~144。『孫本文文集』（全10巻, 2012年発行）の第1巻の『社会学原理』は、5編28章構成であるので1944年の新版が収録されている。
- (36) この革命は1840年のアヘン戦争から1919年の五・四運動までの旧民主主義革命および1919年から1949年の新中国建国までの新民主主義革命を指す（ただし、この初版の序文を孫本文が書いたのは1934年8月27日である）。
- (37) 孫本文, 1935, 初版自序, p.2。この序の末尾には、「民国23年8月27日、呉江孫本文序於南京国立中央大学」と記されている。
- (38) 陳樹徳, 1984, 前掲論文, p.145 および韓明謨, 2005, 前掲書, p.85。20歳の夭折した次男の名前を陳は「世英」、韓は「世実」としているが、ここでは韓の世実を採用した。「孫本文の次男孫世英同志はかつて蔣南翔らの同志と一緒に有名な『十二・九』学生運動の指導に参加した。また、のちに革命活動のために尊い命をささげた」（陳樹徳, 同上, p.145。「1918年3月、次男世実出生。後に清華大学で学び、1936年中国共産党に入党。『一二・九』の北平学聯党組指導メンバーになる。1938年10月、武漢近辺で犠牲になり、後に烈士として追認された。孫本文は世実が革命に参加することを積極的に支持した。世実が生前家族へ書いた手紙を、孫本文はすべて保存していたが、『文革』の期間中に造反派の家財の差し押さえによって投げ捨てられた」（韓明謨, 同上, p.85）。孫本文の民国期の社会学に対して批判的検討を行なった、韓明謨は「清華大学学生、共産黨員、『一二・九』学生運動指導メンバーであった次男孫世実がこの年、武漢抗日戦争の最前線で国ために命をなげうつ。孫本文大兄を哀悼してやまない」という（韓明謨, 同上, p.92）。次男世実の夭折の時、孫本文は46歳、そして亡くなった次男の手紙が投げ捨てられたのは1966年6月、孫本文74歳の時のことである。
- (39) 韓明謨, 2005, 前掲書, p.98。
- (40) 周曉虹, 2012, 前掲論文, p.5。
- (41) 百科斉放・百家争鳴運動期（1956年~1957年6月）の社会学復活の活動にも賛同しなかった孫本文はどのような心境であったろう。新中国成立後、ただちに社会学は禁止されたが、5年余りのちに起こった百家争鳴のなかで社会学の復活の主張をした呉景超、費孝通、呉文藻、潘光旦、雷潔瓊、袁方らは、雷潔瓊を除き、共産党の反右派闘争（1957年6月8日~）のなかですべて右派分子にされた。このなかでも、呉景超は反右派闘争時にしばしば批判された「社会学在新中国還有地位嗎？」（社会学は新中国でまだ地位はあるか）（『新建設』, 1957年1月号, p.61）を書いた。そのなかで「…全体的にみれば、ブルジョア社会学は、その立場、観点、方法は基本的に誤っていた。しかし、百家争鳴の時代、われわれはわが国の哲学の学部の中にも、やはり社会学の課程を設置することが必要だと考えている。…わが国の史的唯物論者は、ブルジョア社会学と思想闘争を行なう過程で、自らのマルクス・レーニン主義の水準を高めることもできる。…旧社会学にはまだその他の部分、たとえば、人口理論および統計、社会調査（都市社会学と農村社会学はいずれも社会調査と一緒にして授業することができる）、婚姻、家族、女性、児童などの問題、社会病理学の中かの犯罪学の部分はいずれも考慮してその他の学院の関連する学部と一緒に授業に入れることができる。…これら

の課程を開設するには、当然昔のテキストを採用することはできないし、授業にも古い立場、観点、方法を取り入れることはできない。しかし、史的唯物論の知識を基礎にして、これらの問題を研究することはわが国の社会主義社会の建設に対してもやはり有用である」と大胆に書いている。しかし、この主張は半年後にはじまった反右派闘争で批判の矢面に立つことになるのである(それについては、星明、1995、『中国と台湾の社会学史』、行路社のなかの「新中国成立以後の社会学-反右派闘争のなかでの社会学-」(pp.103-113)を参照されたい。)

- (42) この当時の学者とは譚嗣同を指す。中国で最初に社会学という名称が書物にみられるのは譚嗣同、1896、『仁学』(= 1989、西順蔵、坂元ひろ子 訳注、『仁学：清末の社会変革論』、岩波書店(岩波文庫)である。そのなかで譚は「…仁学を学ぶものは、仏書では『華嚴宗』および心宗、相宗の書に通暁しなければならない。西洋の書では『新約』と算額、格致、社会学の書に通暁しなければならない」(同上、p.22)と述べている。しかし、社会学の名称をあげただけで、社会学の学問的性格にはなにも触れていない。
- (43) これは岸本能武太、1900、『社会学』、大日本図書、章炳麟訳、1902、『社会学』、上海広智書局である。これは外国の社会学の著作が翻訳された最初のものである。
- (44) 余天休が組織した「中国社会学会」を指す。この学会は『社会学雑誌』を1992年から1933年にかけて、第1巻第1期から第5巻第7期までを刊行したが、以後停刊になった。
- (45) 孫本文らが上海と南京在住の社会学者を中心に1928年に設立した「東南社会学会」が、1930年に全国的規模の「中国社会学社」に発展したことを指す。
- (46) 『社会建設月刊』は1944年7月に創刊号(第1巻第1期)が発行されたが、一時停刊し、1948年5月に復刊第1巻第1期として復刊した。その後、1948年12月の復刊第1巻第8期をもって停刊した。孫本文は創刊から停刊まで、常に総編纂者であった。その創刊号の発刊詞に「抗日戦争の勝利が日増しに近づき、建国事業をさらに強力に推進しなければならない。しかし建国事業は入り組んで手がかりがつかめない、必ず全国のさまざまな専門家や学者は各方面の研究や設計に従事し、それによって、はじめて首尾よく一斉に推し進めることができる。本刊の発行の目的は、全国の理論研究の豊かな社会学者および実際の経験の豊かな社会事業と社会行政の専門家に働きかけ、戦中および戦後の社会建設に関するさまざまな理論と実際問題を共同で討論し、社会学理論と社会技術を一つの炉に溶かし、各個人のそれぞれの分野から、その研究の成果をだし、この建国の偉業に対して少しばかり貢献することにある。…要するに、本刊の使命は全国の社会学者および社会事業と社会行政の専門家を集合させ、社会建設に関するさまざまな理論および実際問題を共同研究することである。しかし発刊したばかりで、欠点が多いに違いない。望むらくは全国の読者諸賢の教を請いたい」と記されている。この発刊詞には執筆者名の記載がないが、総編纂者の孫本文である可能性が高い。

〔資料〕

この資料は、孫本文の社会学の最後の著書になった『当代中国社会学』（1948）の終章「第22章 結論－回顧と展望」（結論－回顧と展望）の翻訳である。このなかで、孫は中国の社会学のこれまでの発展と成果、現在の社会学者の研究傾向、そして今後の中国の社会学がなすべき活動について述べている。かれは社会学が新中国でたどる運命を予見したごとく、それへの対策として社会学の果たしてきた、そして果たしている役割を述べ、さらに新中国における展望さえも述べている。なお、孫本文は、『社会学刊』、第6巻合刊（1948）に「晩近中国社会学発展的趨勢」（最近の中国社会学の発展傾向）を1947年11月28日に書いているが、ここに訳出したものはその2か月余りの後の1948年2月1日のものであるが、この二つの文章には一部重複する内容がある。

結論－回顧と展望－

孫本文著・星明訳

われわれはうへの各章のなかで、すでに中国の社会学の起源と発展、および最近の研究の傾向を簡潔に述べた。ここで再びその要点を以下に総括して、本書の結論とする。

中国の社会学は、名目上は清の光緒22年、すなわち西暦1896年にはじまった。当時の学者の著作のなかに「社会学」の名称がはじめてあらわれた⁽⁴²⁾。しかし、実際に社会学の内容を紹介し、中国にとり入れたのは6年後、すなわち光緒28年、西暦1902年のことである。かの時、嚴復が訳したスペンサーの『群学肄言』（1903）は全部脱稿していたし、章炳麟の訳した『社会学』（1902）が出版されていた⁽⁴³⁾。40、50年来に、徐々に各国の書籍の翻訳から自らの著作へ、初歩的な教科書の翻訳から参考用の図書の編纂へ、少数のありふれた読み物から各部門の専門的な書籍や定期行物へと進展していった。すでに出版された訳書や著作の総計は1,000冊を超えている。ここに著作や文献から、中国の社会学の発展をみることができる。これが要点のその一である。

学校教育についていえば、社会学のカリキュラムは清の前期の光緒32年、西暦1906年にはじめてみられるが、その時の『奏定京师法政学堂章程』のなかに、社会学の科目がはじめて設けられた。40年来、徐々に少数の大学の科目から一般の大学の課程へ普及し、大学での選択科目からさらに学部専門科目になり、理論の研究からさらに実際の応用になった。社会学部の卒業生はこれまでに1,000人を超え、現在、大学の社会学部で教鞭をとっている教師は100人を超えている。ここに社会学の教育面から、中国社会学の発展をみることができる。これが要点のその二である。

さらに学術団体についていえば、中国の社会学界のなかに組織ができたのは民国11（1922）年からである⁽⁴⁴⁾。しかし、この学会は参加者が少なかったためにいつの間にか解散してしまった。しかし、民国17年（1928）から別の組織ができ、後に全国規模の団体に拡大した⁽⁴⁵⁾。19年前後、全国の社会学者はこの唯一の学術団体のなかで各々の研究を行ない、一致団結の精神がみられた。ここに学術団体の面から、中国の社会学の発展をみることができる。これが要点のその三である。

これが約50年の中国の社会学の全体的な発展史のうえから得られた印象であるが、事実上、中国の社会学が比較的発展したのは、わずかにここ20年余りのことである。この期間のなかで、われわれはさらにいくつかの顕著な発展の傾向をみいだすことができる。

第1に、実地の調査と研究を重視していること。ここ20年、各大学の社会学部で「社会調査」あるいは「コミュニティー研究」などのカリキュラムを重視しないところはないし、また「統計学」あるいは「社会統計」を基本科目にとり入れていないところもない。さらに実地調査に関する報告は、都市あるいは農村調査、概況あるいは部分調査、初歩的あるいは詳細な調査にかかわらず、方法はよいよ完全の域に達し、内容もほぼ充実してきた。たとえば、李景漢氏の『定県社会調査概況』（1933）はアメリカの「壁芝堡調査」（ピッツバーグ調査）（1909～1914）あるいは「春田調査」（スプリングフィー

ルド調査) (1920) に匹敵する。陳達氏の『雲南呈貢県, 昆陽県戸籍与人事登記報告』(1946) はアメリカあるいはイギリスの通常の戸籍報告に比肩し得る。燕京大学の許仕廉, 楊開道氏らの『清河調査』(1930) はアメリカの C. J. ギャルピンの「農村社会解剖」に比肩する。陶孟和氏の『北平生活費之分析』(1930) はアメリカの劳工統計局の生計調査に肩をならべる。その他, 吳澤霖氏らの『庐山黒苗的生活』(1940), 費孝通氏の『禄村農田』(1943), 柯象峯氏の『西康社会之鳥瞰』(1940), 徐益棠氏の『雷波小凉山之僱民』(1944) および国民政府社会部統計室編の『成都社会概況調査』(1944), 『北碚社会概況調査』(1943) などは, すべて極めて価値がある記録である。これ以外に, 各大学および中央研究院社会研究所などの機関が発表した調査報告も非常に多いが, すべてこの傾向を示しているといえる。

第2に, 自国の資料の分析と例証を重視していること。この20年, 著述面で重要な発展がある, つまりみんなが自国の各種の実際の社会データを重視している。初期の社会学はほとんど日本語からの翻訳であり, 続いてアメリカ, イギリス, フランスからの翻訳であるが, なかでもアメリカの書物から翻訳されたものもとても多い。すなわち, 自らの著作であっても, 欧米の材料に基づいている。ただここ数年来, 徐々に自国のデータを採用しており, これは明らかに著作面の進歩である。例をあげれば, 陳達氏の『人口問題』(1934), 許仕廉氏の『中国人口問題』(1930) と『人口論綱要』(1934), 柯象峯氏の『現代人口問題』(1934) と『中国貧窮問題』(1935), 吳景超氏の『第四種国家的出路』(1936), 李景漢氏の『中国農村問題』(1937), 喬啓明氏の『中国農村社会経済学』(1946), 吳澤霖氏の『世界人口問題』(1937) などの著作は, おおむね自国の統計あるいは歴史資料を引用しており, すべて内容は相当に充実している。そのなかで, 中国の問題を明示して自国の資料を専門に論じているもの以外にも, その他のものの多くも自国の事実を重視し, 外国の資料と相互比較している。たとえば, 陳達氏の『人口問題』についていえば, そのなかで少なくとも30, 40パーセントは中国の材料をもっぱら論じている。歴史的資料を使っているのは, たとえば第1章では墨翟, 杜佑, 蘇軾, 洪亮吉らの人口理論を引証し, 第14章の「自然淘汰」論では, わが国の歴代の災害と凶作の資料を引用しており, 非常に豊富である。とりわけ統計の材料を使っている第7章の「中国人口の予測」論であり, とくに現実に合っている。

これ以外に, たとえば本書の著者の『現代中国の社会問題』はすべて中国の四つの社会問題を論じており, ここ10年余りの各種の関連統計資料のなかで, その重要なもので引用していないものはない。たとえ欧米各国の統計資料に論究していても, 本国の問題との比較を目的としている。拙著の『社会学原理』と『社会心理学』については, そのなかで引用している材料は本国の歴史, 時事および統計などが多い。上述したそれぞれの著作はすべて同じ傾向をはっきりとあらわしている。

第3に, 有名で偉大な作品の翻訳を重視していること。この時期の西洋の著作の翻訳は, 比較的長編あるいは有名で権威のある文献を重視している。たとえば, 黄凌霜(黄山山)氏が訳した P. A. ソローキンの『当代社会学学説』(1930) (*Modern Sociological Theories*, 1928) とアベルの『德国系統的社会学』(1932), 高達観氏が訳した C. プーグレと J. ラフォール Raffault の『社会学原理』(1936) (*Éléments de sociologie, textes choisis et ordonnés*, 1926), 胡澤氏が訳した L. T. ホブハウスの『社会正義論』(1935) (*The elements of social justice*, 1922), 廖凱声氏が訳した L. T. ホブハウスの『社会進化与政治学説』(1935) (*Social evolution and political theory*, 1911), 王力氏が訳した E. デュルケムの『社会分工論』(1935) (*De la division du travail social : étude sur l'organisation des sociétés supérieures*, 1893), 張世文氏が訳した R. M. マッキーヴァーの『社会学原理』(1933) (*Community : A Sociological Study*, 1917), 鐘兆麟氏の訳した C. A. エルウッドの『文化進化論』(1932), E.S. ボガーダスの『社会思想史』(1932), P. A. ソローキンの『社会変動論』(1932) および C. ウィッスラーの『社会人類学』(1935), 吳澤霖と陸德音二氏共訳の F. W. Blackmar と J. L. ジリン の『社会学大綱』(1935) (*Outline of sociology*, 1919), 費孝通氏が訳した W. F. オグバーンの『社会変遷』(1933) (*Social Change : with respect to culture and original nature*, 1922), B. K. マリノフスキーの『文化論』(1943) と R. W. フェー

スの『人文類型』（1944）、楊堃氏が訳した M. モースの『法国現代社会学』（1933）、李安宅氏が訳した K. マンハイムの『知識社会学』（1944）などである。これらの書の原著はすべて人びとによく知られ親しまれ、高く評価されている名作である。

第4に、社会学理論体系の検討を重視していること。この時期には、なおまだ顕著な特徴がある。つまり社会学者が次第に社会学の思想体系を重視してきたことである。たとえば、朱亦松氏の『社会学原理』（1928）、応成一氏の『社会学原理』（1933）、および拙編の『社会学大綱』（1931）と自著の『社会学原理』（1935）などの書である。すべて内容は相当充実しており、なおかつ体系もきわめて明確である。筆者が発表した「社会学体系発凡」（社会学体系要旨）（1944）および「社会学的基本観点」（1944）の二つ、応氏の「一個社会学思想之体系－我对社会学の見解」（社会学思想の体系－わたしの社会学に対する見解）（1947）、林耀華氏の「人与人関係の研究」（ひととひとの関係の研究）、「近代社会研究的綜合観点」（1947）、趙承信氏の「社会学方法論上の幾個問題」（社会学方法論上のいくつかの問題）（1947）などの論文はすべて方法論と理論の体系を重視していることをはっきり示している。

第5に、新学説の紹介を重視していること。この時期のもう一つの特徴は、新学説の紹介を重視していることである。はじめて筆者が『社会学上文化論』（1927）のなかで、アメリカのオグバーン教授の文化理論を紹介したが、当時では斬新な進展であった。のちになって、文化学説は国内の社会学者の大きな関心を引き起こした。前後して出版されたものには、黄文山（黄凌霜）氏の『文化学方法論』（1934）、陳序経氏の『中国文化的出路』（1934）、許仕廉氏の『文化与政治』（1929）および拙著の『文化与社会』（1927）、『社会的文化基礎』（1929）、『社会変遷』（1929）などがある。これらはアメリカの文化理論の紹介に傾注している。ヨーロッパの文化理論を紹介したものには、葉法無氏の「斯賓格勒的文化史観及其批評」（O. シュベングレーの文化史観およびその批評）（『社会学刊』1巻3期）（1930）、張資平と張逸雲両氏が訳した『文化社会学』（日本の関栄吉の書）（1930）、衛惠林氏の訳した『文化的要素及其形態』（M. モースの文化的要素とその形態）（フランスのモースの書）（1935）などがある。現在、イギリスの機能主義人類学者の理論を紹介した呉文藻氏の貢献が非常に大きい。呉氏の「効能派人類学的由来与現状」（機能主義人類学の由来と現状）（1946）と「布朗教授的思想背景与学問上の貢献」（ブラウン教授の思想背景とその学術上の貢献）（1936）の二つの論文は社会学界の細心の注意を引いた。費孝通氏の訳した『文化論』と『人文類型』の二冊はさらに機能主義派を大々的に広めた。その他には、黄文山氏の『三民主義与知識社会学』（1944）、李安宅氏訳の『知識社会学』、拙著の『近時社会学上一種新理論－S学説』（最近社会学上の新理論－S学説）（1945）などはすべて新興の学説を紹介したものである。

第6に、社会事業と社会行政の研究を重視したことである。最近の7、8年で、社会学者は実際の必要と学生の卒業後の進路に鑑み、次第に社会事業と社会行政の研究に注意を払っているが、これは確かに国内の社会学界の新たな発展の一つである。社会学と社会行政との関係はつまるところいかにあるかはともかくとして、社会部の成立によって、国内ではにわかに社会事業と社会行政の人材の不足を感じ、その結果多くの人材をつくりだす必要が生じた。この養成はもちろん社会学部がもっとも適しているので、大学の社会学部はほとんど社会事業と社会行政の課程を増設した。社会事業に関する著作には、たとえば呉瑜珍女士の『社会個案工作方法概要』（ソーシャルケースワーク方法概論）、林良桐氏の『社会保険』、柯象峰氏の『社会救济』、言心哲氏の『現代社会事業』（1944）などがある。社会行政に関する著作には、たとえば曾友松氏の『戦時社会行政研究』（1944）、社会部編の『社会行政概論』などがあり、すべてこの方面の重要な書籍である。『社会建設月刊』⁽⁴⁶⁾に関しては、すべて社会事業と社会行政を討論する文章であり、とりわけ最近の新たな貢献である。

上述の各種の傾向からみれば、中国の社会学の発展は今日までに、すでに相当の基礎をもっている。しかし、その基礎はやはりたいへん弱く、どのようにしてすでにある基礎を固め、発展を加速させるか、それには全国の社会学者が分担しながら協力し、いっしょに努力することが必要である。ここで「五十年来的中国社会学」の末尾に数年前に書いた今後携わるべきことに関する一つの文章があるの

で、以下に抜粋し、本書の結論とする。

第1に、中国の理論社会学の確立。今後、社会学者は中国化した社会学の確立に努力しなければならない。その重要な活動には三つある。

1. 中国固有の社会史の資料を整理すること。わが国の古い書籍のなかにはきわめて豊富な社会学の資料がある。それらで研究者に役立つものは五つである。
 - (1) 社会学説について。およそ昔のひとの社会生活あるいは社会問題についてのさまざまな思想はすべて収集と整理をして、時代順に、系統性をもった中国の社会思想史を編纂しなければならない。
 - (2) 社会理想について。古今の賢哲が発表した社会組織および社会生活についての理想とプランも、また収集と整理をして、中国の社会理想史を編纂しなければならない。
 - (3) 社会制度について。歴代の社会制度の性質、機能の状況と変化ならびにそれらの相互間の関連はさまざまな社会制度史を編纂するために、すべて分析しなければならない。
 - (4) 社会運動について。歴代の社会運動の性質、起源、範囲およびその社会に与えた影響などは社会運動史を編纂するために、すべて分析と整理をすべきである。
 - (5) 一般の社会的行為について。歴代の偉人・哲人が発表した立派な言行は、きわめて豊富であるので、社会学あるいは社会心理学の参考と引証に十分に提供できる。それぞれ収集を行なって、社会資料集を編纂して、利用に供するべきである。
2. 中国社会の特性を実地に研究すること。歴史的資料を整理し、わが国の社会的特性の研究に供する以外に、なお多方面から現実の社会に対して詳細で精密な調査と研究を行なわねばならなし、それによってわが国の社会的本質を徹底的に調べなければならない。したがって、今後各地の重要地域に対して、計画的に都市と農村の調査を行ない、各種の社会調査研究報告を編纂し、各方面の参考に供さなければならない。
3. 社会学の基本図書を系統的に編纂すること。わが国の社会学はすでに40余年の歴史があるが、社会学理論と応用方面に関する比較的充実し、かつ完全な書物はまだ多くない。しかも、まだ大学のテキスト用に供するものがない分野もある。たとえば、西洋社会思想史、中国社会思想史、近代社会学理論、中国社会発展史、社会制度、民族学、都市社会学、社会学研究方法、社会行政、社会政策、社会立法、近代社会運動などの部門は、少数の訳書を除いて、まだ自国のひとが著した適当な参考図書はない。したがって、基本図書を急いで編纂する必要がある。

以上の三つの方面の活動から、われわれは自国固有の社会的資料を十分に収集ならびに整理でき、さらに欧米の社会学者の綿密で行き届いた理論に基づいて、完全に中国化した社会学体系を打ちたててことを願っている。

第2に、中国の応用社会学の確立。理論社会学の研究以外に、同時に直ちに中国の国情に適合した応用社会学の建設に従事しなければならない。それらの重要な活動には三つがある。

1. 中国の社会問題を詳細に研究すること。これまでのわが国の社会学の文献のなかでは、社会問題の類のものが最多である。しかしこれらの書籍の大部分は西洋の社会問題を検討しており、そのなかで自国の社会問題を専門に論じているものはきわめて少ない。今後全国の社会学者は、自国の社会問題の特質および解決可能な道筋を徹底的に理解するために、それぞれ自分の持ち場で、それぞれの比較的小さな問題について詳細な研究を行なうべきである。
2. 中国の社会事業と社会行政を早急に討議すること。わが国の社会学者は従来社会事業と社会行政の研究を重視しなかったことは否定を要しない。社会部が成立してからはじめて一般の社会学者の注意を引いた。今後、一部の社会学者はもっぱらこの方面で努力して、それによってわが国の社会事業と社会行政の実際状況およびその発展可能な道筋を研究すべきである。
3. 中国の社会建設のプランを着実に研究すること。今後、全国の社会学者は上述した社会問題、社会事業と社会行政に関する材料に基づいて、社会組織、社会福祉、社会サービスおよび社

会運動の各方面から、当面および今後の全国的なニーズを詳細に検討し、さまざまな社会改革のプランを周到かつ慎重に立案し、それによって政府の参考に供さねばならない。

以上述べてきた各方面の努力から、今後社会学者は社会学理論と本国の社会的事実に基づいて、中国の社会的ニーズに適合した応用社会学を確立打ちたて、それによって国家と民族の向上・発展を促がさねばならない。

第3に、社会学の人材の養成。最後に、われわれは社会学の人材の養成に対しても、また非常に重要だと考える。わが国の社会学者の大多数は全国の各大学の社会学部に集中しており、ごく少数が中央および各省や市の行政機関に分散している。近年、大学のカリキュラムが増え、社会事業が発展したことによって、人材がきわめて不足する心配がある。今後は志のある若い社会学者の海外へ派遣してさらに勉強を奨励しなければならない、それと同時に国内の各大学のなかの人材と設備が比較的充実した社会学部および社会学研究所で、青年学者を育成し、それぞれの専門につうずるように、その長所を伸ばし、それによって全国の切迫した必要に答えなければならない。これができれば、中国の社会学の前途は、立ちどころに限りない希望がある。

出典：孫本文，1948，「第22章 結論－回顧与前瞻」『当代中国社会学』，勝利出版公司，pp.279-286。なお，孫本文，1948，「晚近中国社会学発展的趨勢」『社会学刊』，第6巻合刊，中国社会学社，pp.46-48から著作や論文の発行年などを追加した。また，欧文などの一部の原典名は星が挿入した。

〔付記〕

この小論は、2014年度佛教大学海外長期研修の成果の一部である。わたくしに研修の機会を与えてくださった本学および上海社会科学院のみなさんにころから御礼申しあげます。

なお、本稿でも中国社会学史関連の著作から多くを参照、引用させていただいた北京大学社会学部の韓明謨教授が2014年11月18日午前7時に、病気のため北京市の海淀医院で逝去された、享年96歳。先生とは北京でなんどもお会いしたし、ご高書『中国社会学史』の翻訳も出版させていただいた。いま一緒に撮った写真をみながら、ホテルまでお一人でできてくださり、お持ちくださったリングを食べながら、西南聯合大学時代のこと、先生の3人の恩師のこと、社会学の回復時のこと、翻訳の進展のことなどをお話したことが想いだされる。

ここに謹んで韓明謨先生の冥福をお祈りいたします

（ほし あきら 現代社会学科）

2015年3月16日受理